

B. 円滑な学位授与の促進**①複数教員による多面的な指導体制の整備****●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

建築の保存・再生の事業に実際に参加する問題解決型のフィールド実習をプログラムの中核としたが、その実習の中で、参加する事業で必要となる知識・技能を有する分野の複数の教員が指導にあたるようにしたことと、さらに、実習現場で実際に事業に携わるさまざまな分野の技術者、研究者も指導者として参加いただき、きわめて多面的な指導体制を構築することができた。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

上記フィールド実習において、参加する学生が、自由に成果の書き込みができるWeb のシステムを構築し、さらに成果報告書の中にも自分が獲得したと思われる知識・技能を書き込ませる欄を設けた。これは、実習の情報発信などの意義もあるが、それ以上に、多面的な指導体制が実際に有効なものとなっているかの検証のために設けた仕組みである。実際に、実習を修了するごとに、これらのデータから指導体制の検証を行った。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

広範な分野から参加する多面的な指導体制は、基盤となる建築学だけに閉じるのではなく、歴史学、博物館学、都市計画学など広い分野へ学生の視野を開かせることに確実に繋がった。上記のWeb のシステムや成果報告書での学生の発言から、そのことは十分にうかがえる。とりわけ、保存や再生の事業を担う行政や施設管理者の指導と議論は、学生が、この分野の仕事の意義の大きさを体験的に学ぶことに大きく貢献した。学生の報告には、事業が単に技術的やデザイン的な課題だけで実施できないことを理解するものが多かった。

**●奈良先端科学技術大学院大学 物質創成科学研究科物質創成科学専攻
「新領域を切り拓く光ナノ研究者の養成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

- ・ 博士論文研究の進捗状況及び身につけるべき能力の習得度を評価するスーパーバイザーボード制を充実させた。年2回（6月と11月）中間審査を行い、各学生のスーパーバイザーボードの構成は、主指導教員と他研究グループの教員2名以上

を含む4名以上とした。さらに、以下のルールを適用した。1) 他研究グループの教員のうち1名が学位論文審査委員会の委員長を務める(副指導教員)。2) 他分野の教員を必ず1名加えなければならない。3) スーパーバイザーボードには、3つ以上の研究グループから教員が含まれていなければならない。4) 助教が加わってもよい。5) 学位論文審査委員会とスーパーバイザーボードは重なってもよい。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・産業界で活躍する連携研究室の客員教授や助教などの若手研究者もスーパーバイザーボードのメンバーとなることを可能とし、学生が様々なバックグラウンドを持つ研究者と研究討論をすることにより、広い視野でアウトプットを意識させた。
- ・スーパーバイザーの評価項目は多岐にわたったが、それぞれの項目の評点とコメントを記載することにより、学生が自分の達成度を客観的に判断できるよう配慮した。
- ・円滑な学位授与を推進するため、各スーパーバイザーの総合評価が4.0に達することを学位審査願の受理条件とした。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・学生は学位取得に向けて強化すべき弱点を理解した上で、円滑な学位取得を目指すことができるようになった。
- ・標準修業年限内学位授与率は、事業期間を通じた平成19年度(秋)–21年度(春)入学生で向上した。

●九州大学 システム情報科学府電気電子工学専攻

「5つの力をもつシンセシス型博士人材の育成」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施したのか

独創力・企画力・実行力・説得力の養成と産学協働による実践的教育指導体制の確立を目的として、複数の学内教員および産業界、国内外の他大学の委員からなるアドバイザリ委員会による複眼的視野に基づく評価と指導を実施した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・5つの力を評価するために新たに考案した採点表を用いることで、アドバイザリ委員会における評価結果を客観的かつ定量的に解析できるように工夫した。
- ・上記の採点結果を蓄積・解析するために、九大方式 CI 評価システムを新たに開発し、5つの力の経時変化を個々の学生毎に分析できるようにした。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

アドバイザー委員からのコメントやアドバイスに基づき、学生自らが研究目標設定や具体的な研究実施方法の提案を自発的に行うようになった。また、アドバイザー委員会を平均で2回/年開催することで、従来の博士論文指導に比べてよりきめ細かで進捗状況に即した指導が可能となった。

●徳島大学 医科学教育部医学専攻**「医療系クラスターによる組織的大学院教育」の事例 <医療系>****具体的に何を実施したのか**

教育クラスターに所属する大学院生に対して、その研究テーマに応じて組織横断的な指導体制を構築し、研究指導を行った。また、各教育クラスターごとに、1泊2日の研究交流合宿（クラスターミニリトリート）を開催し、大学院生による研究発表とディスカッション、外部講師招聘による特別講演、ならびに大学院生、若手研究者、教員の交流の場を設けた。さらに、教育クラスターに所属する大学院生全員に、研究指導教員とは別にアドバイザー教員をつけ、研究遂行状況や大学院生活全般に対するアドバイス・指導を行った。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

クラスターミニリトリートでは、教育クラスターに所属する大学院生、若手研究者、教員ができるだけ多く参加できるように、日程ならびに場所の設定を工夫した。また、大学院生同士のディスカッションが活発になるようにリトリートの運営そのものに大学院生の参画を促した。さらに、外部講師には全日程への参加をお願いし、大学院生との交流を促進することで、生命科学者としてのキャリア形成に関するアドバイスを大学院生がうける機会を設けた。アドバイザー教員は、教育部長等が担当することで、学位研究遂行に問題が発生している場合に、適切な介入を行える体制を構築した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

クラスターミニリトリートについては、参加者の90%以上から、他の分野の人と交流することができた、研究内容について十分なディスカッション・意見交流ができた、自分の研究活動に役立つヒントを得た、次年度以降も継続的に開催すべき等、非常に肯定的な意見が寄せられた。また、アドバイザー教員による指導も好評であった。これらの結果から、組織横断的な研究交流の意義が大学院生に浸透するとともに、その研究遂行に寄与した。

●久留米大学 医学研究科

「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 <医療系>

具体的に何を実施したのか

- ・多面的な学生指導を目指し、所属大学の研究室をまたがる複数教員による多面的指導を単位として認め、学生が積極的にこの仕組みを利用できるように推進した。
- ・「国際感染症実習Ⅰ」では、国立感染症情報センターで企画実施されている FETP-J へ参加し、1 か月間の英語での講義、疫学スペシャリストによる集中講義が受講できるよう整備した。
- ・疫学・サーベイランスの基礎となる統計手法のサポート体制として、平成 15 年度文部科学省科学技術振興調整費による人材養成ユニットとして開設されたバイオ統計センターによる、年間を通じたアドバイザー制を導入した。既開設科目のバイオ統計基礎ユニット・応用ユニットの履修を推進し、受講生の要望に応じて、随時セミナーを開催した。
- ・新型インフルエンザによるパンデミックや生物兵器テロ等の大規模災害や特殊災害を想定したシュミレーション訓練では、イギリスの特殊部隊で活躍経験のある SCAT JAPAN のスペシャリストの指導が受けられるよう整備した。
- ・科学的立証に基づく実践能力の向上をめざし、ケアや研究活動、環境感染調査における細菌やウイルス等の取扱い方、培養や細菌検査に必要な備品等の教育環境を整備した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・理論と実践力、研究力の総合力を養う指導体制と環境整備を目指した。具体的には、横断的科目においても、臨床での ICT（感染制御チーム）によるラウンドへの参加、FETP-J への参加、バイオユニットへの参加、シミュレーション訓練への参加、一般市民・在日外国人・小学生・高校生への感染症防止教育、看護実践などのフィールドを重視し、各専門の教員から指導が受けられる体制とした。セミナーでは、国外の感染症看護での実績をもつ専門家や災害時に国外において公衆衛生活動を実践した専門家に、具体的な経験をあげての講演をお願いした。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・学生は感染症看護について、異なる視点からの講義や演習・実習により、広い視野を得ると共に、将来への進路を考える上で、实际的で貴重な情報を得ることができた。また、統計ユニットへの参加は、研究へのモチベーションとスキルを高めるのに効果的であった。